

汗とハンカチ



© Hideki Otsuka

小山実稚恵

ピアノと私

141

公演情報

東京交響楽団

ニューイヤーコンサート2026

ユベール・スダーン（指揮）、東京交響楽団

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番

1月10日（土）14:00 サントリーホール

問い合わせ：TOKYO SYMPHONY チケットセンター

☎ 044-520-1511

1月11日（日）14:00 所沢ミューズ

問い合わせ：ミューズチケットカウンター

☎ 04-2998-7777

1月12日（月）14:00 横浜みなとみらいホール

問い合わせ：神奈川芸術協会 ☎ 045-453-5080

ピアニストがステージに登場してピアノの前に座る。そして持ってきたハンカチをフワリと置く。ピアノの金属フレームの左手前には、製造番号が書かれた窪みがあるのですが、なぜかそこはピアニストのハンカチ置き場のスペースになっています。

舞台に出る時に、私はいつも必ずハンカチを携えます。いつからハンカチを持っていくようになつたのかなと、ふと気になりました。始まりは子供の頃のピアノ教室の発表会だつたと思います。舞台で一人ずつ演奏するのですが、お辞儀をして座る前、まずはピアノの前に立つて、左手で鍵盤の手前を軽く押さながら右手に持ったハンカチで高音部から低音部まで鍵盤を丁寧に拭いていました。皆がそうするので私も真似をして、前に弾いた友達の汗や汚れを取つ

て、心も清めて、そんな気分になっていたのでしよう。実際、子供はわずか数分の曲しか弾かないわけですから、全員がわざわざ鍵盤を拭く必要などなかつたのに…。リサイタルやコンサートとなれば演奏時間は長く、密度も濃くなります。客席からは運動量の方が目につくようです。腕や指の激しい運動のために汗をかくのは？と思うらしく「コンサートの後はマラソンを走った後のような疲労があるのではないですか？」「1回のコンサートで3キロぐらいの体重が減つてしまふのではないですか」と聞かれたりします。

そして、そのコンサートで使われなかつたハンカチは、演奏が終わつてもそのままポツンと取り残され…。帰り際に毎回のように調律師さんがハンカチを届けてくれます。今や私は、忘れものをするためにハンカチを持って行つてゐるようです。それでも私にとつて舞台とハンカチはワンセット。ずっと舞台にハンカチを持つて行くでしょう。

動的な疲れを感じることは、ほとんどありません。額からタラツと流れる汗は一度もかいたことはありませんし、汗だくになることなどおそらくありません。しかし、人間はひとりひとり体質が違うので、演奏が始まつてほどなく第1楽章が終わるとハンカチを取り出して、流れ出る汗拭いている方もいます。コンチエルトの時にはピアノの鍵盤に、振り向きざまの指揮者の汗粒が飛んできたこともあります。でも私は、これらの汗も運動から出る汗ではなく、精神的な熱量が造る汗だと思っています。

近年は照明がLED光となりましたので、舞台上がむしろ涼しいほどです。だから、汗のために私がハンカチを使うことなど、もはや無いのですが、今も舞台には必ずハンカチを持つて出ます。

KOYAMA MICHE 東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキ国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」(2006~17年)や「ベートーヴェン、そして…」(19~21年)は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホール・シリーズ「Concerto〈以心伝心〉」を開催。来シーズンはソロ・リサイタルのシリーズを予定している。ショパン、チャイコフスキの二大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「子どもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。